

「王事靡盬」解釈から見た『毛傳』の訓詁態度

藪 敏裕

（一九九三年一月二十一日受理）

一、問題の所在

本稿では、以下『毛傳』^①を検討するが、その目的は『詩』^②そのものの原義説明ではなく、経学としての詩経学が成立する過程にある『毛傳』が、どのような歴史的背景をもつて成立していくかを部分的に解明し、経学成立の一端を明らかにすることにある。

近年、詩経学においては、当然のことではあるが『詩』の本文そのものの研究が中心であり、『毛傳』は単にその一注として『詩経』を読むための二次的・傍系的なものとしての取扱いしか受けてこなかった。そのため、『毛傳』がいつ、いかなる人々によって、なんのために作られたのかという問題にいたっては、一部の例外を除けばほとんど研究の対象とはされてこなかった。しかし、また一方『毛傳』は『詩』に対する体系的な現存する最古の注であることよつて、陰に陽に諸家の『詩経』解釈に多大の影響を与えてきた。そして、『毛傳』の持つこの二重性ゆえ、現在の『詩』、『詩経』解釈も諸説紛々として一部成果はあがっているものの、定論を見ていないのが実情である。したがつて、『毛傳』の内容および成立に関する問題を明確にすることは、『毛傳』そのものの研究のためにも、また『詩』、『詩経』解釈の確立のためにも、重要な

課題であると考えられる。なお、本稿で『毛傳』を考察するにあつては、『毛傳』は『詩』に対する注であるから当然のことながら『詩』の本文を参考にするが、あくまで参考であつて、究極的には『毛傳』自身がどのように『詩』を理解しているのか、あるいは理解したいのかという『毛傳』自身の態度をより重視して考察する。また『毛傳』の訓詁態度を考察するには、当然『毛傳』の作者が誰であるのかという点の問題となるが、『漢書』藝文志等『毛傳』以外の外部資料は諸説錯綜しており確定しがたくまたあまり意味もないと思われるので、今回は言及しない。本論では、あくまで『毛傳』そのものが『詩』をどう解釈しているのかという『毛傳』そのものについての内在的研究を基本にして考察することとする。

『詩』には、教篇にわたつて頻出する慣用句がある。そして、これらの慣用句のなかで本論では特に「王事靡盬」という句に注目して、これに『毛傳』がいかなる態度で訓詁をつけているのかということを検討する。「王事靡盬」は唐風・鵝羽篇、小雅・鹿鳴之什・四牡篇、同采芣苢篇、同杕杜篇、小雅・谷風之什・北山篇の五篇にわたつて合計十二回見られる句であるが、特にこの句に注目するのは次の二つの理由からである。それは、①唐風・鵝羽篇、

小雅・鹿鳴之什・四牡篇等での「王事靡盬」に対する「毛傳」の訓詁が、ほかの文献のそれと著しく異なり、「毛傳」の訓詁態度を考察するに興味深い箇所であること、②しかも王引之によって「盬、息也」とその訓詁が確定されているので、この句の原義的訓詁と『毛傳』の訓詁の差が明確であることに拠る。そこで本稿では、これらの「王事靡盬」に対する『毛傳』の訓詁を手がかりにして、『毛傳』の訓詁態度をどのように考えることができるのか、ということを検討してみたい。

二、『毛傳』による「王事靡盬」解釈

(1) 唐風・鴛羽篇

鴛羽篇は、

敏 裕 藪

○肅肅鴛羽、集于苞栩、王事靡盬、不能執耒耜、父母何怙、悠悠蒼天、曷其有所、

○肅肅鴛翼、集于苞棘、王事靡盬、不能執耒耜、父母何食、悠悠蒼天、曷其有極、

○肅肅鴛行、集于苞桑、王事靡盬、不能執稻粱、父母何嘗、悠悠蒼天、曷其有常

と三章、各章七句からなる疊詠形式の詩である。それぞれの章の第三句目に「王事靡盬」が見える。近年の『詩』本文それ自体の研究に基づく『詩』解釈^⑤、たとえば白川静は鴛羽篇全体の詩意を「はげしい役務に苦しみなげく歌」とし、第三句の「王事靡盬」に対しては「王事盬むこと靡し」と訓読し、「役務のことは果てしなく」と解釈している。また、境武男によれば鴛羽篇全体の詩意を「徵発せられた兵士の心」を述べたとし、第三句の「王事靡盬」

に対してはやはり「王事盬むことなく」と訓読し、「はてる日のないこのいくさ」と解釈している。鴛羽篇は、たとえば第一章についてみると第一句・第二句の「肅肅鴛羽、集于苞栩」という興詞が、本来「出征」の興詞であるのか、あるいは「死者の靈魂」の興詞であるのかという『詩』解釈上重大な問題を含んでいいるが、とりあえずはこの興詞がなにを意味するかは措いて、つづく第四・五句に「耒耜を執ることができない。父母はだれをたよりに生きるのか。」と生計を立てられぬことを嘆いていることを考慮すれば、すくなくともこの第三句「王事靡盬」は「王事の忙しいことを嘆く句である」と推測できよう。ここで「盬」の意味として可能性があるのは、①固（しっかりと）②息（止む）の二つであるから、ここは王引之が『経義述聞』^⑩ですでに述べ、白川や境によつて採用されているように、②説の「苦」の仮借字で「息」の意、「王事靡盬」は「王事盬むこと靡し」ないし「王事盬まず」と訓読するのが正しいということになる。後述する小雅・鹿鳴之什・四牡篇、同采芣篇、同杜杜篇、小雅・谷風之什・北山篇の「王事靡盬」に対してもすべてこの解釈で意味が通り、白川・境等もこれに従っている。

ところが一方、『毛傳』はこの「王事靡盬」に対して「盬、不攻緻也」と注している。「不攻緻也」とは孔穎達「毛詩正義」^⑪の疏が杜預の説を引いて「是盬爲不攻牢不堅緻之意也」と言うごとく、「堅固でない」という意味である。つまり「王事靡盬」を「王事が堅固でないことではない」つまり「王事はすべて堅固である」と解釈している。『毛傳』が「堅固」という場合には、例えば小雅・鹿鳴之什・天保篇の「天保定爾、亦孔之固」の「毛傳」「固、堅也」等とはほぼ同じであり、これを踏まえて考えれば、「王事はすべてしっかりとっている」ということになる。結局「毛傳」は「王事靡盬」を『鄭箋』^⑫のごとく「我迫王事、無不攻緻也、」つまり「私

には王事が差し迫っている。これをしつかりしないわけにはいかない。」要するに「王事をゆるがせにはできない」と考えていることになる。この解釈が「王事靡盬」の解釈として妥当であるかどうかはひとまず措くが、少なくとも『毛傳』はこの句をこう解釈しようとしているのである。

「王事靡盬」の解釈を『毛傳』がこう考えているとすると、『毛傳』は第一章全体を「鴇がばたばたと飛び、(本来は止るはずのない)苞の羽に止まった。そのように、自分もゆるがせにできない王事に従軍して、(本来は居るはずのない)見知らぬ地にいる。だから、自分は田畑に稷黍を植えることができないし、また父母もたよりとするものとしてない。はるかなる青空よ、いつになったら安息の場所を見つけることができるのか。」と解釈していることになる。第二章・第三章については『毛傳』は第三章第一句の「行」に対して「行、翩也」と言うのみであり、ほぼ第一章と同じと考えていることになる。したがって、『毛傳』は鴇羽篇全体を「ゆるがせにできない王事に従軍して異郷にいる征夫が、故郷の父母のことを心配して嘆く詩」と考えていることになる。この鴇羽篇全体に対する『毛傳』の解釈は原義的解釈と異なるということになる。

(2) 小雅・鹿鳴之什・四牡篇他

ついで四牡篇について考察する。四牡篇は、

- 四牡駢駢、周道倭遲、豈不懷歸、王事靡盬、我心傷悲、
- 四牡駢駢、嘽嘽駘馬、豈不懷歸、王事靡盬、不遑啓處、
- 翩翩者騅、載飛載下、集于苞栩、王事靡盬、不遑將父、
- 翩翩者騅、載飛載止、集于苞杞、王事靡盬、不遑將母、
- 駕彼四駘、載驟駿駉、豈不懷歸、是以作歌、將母來諒、

と五章、各章五句の詩である。一・二・三・四各章の第四句目に「王事靡盬」が見える。『詩』の原義的解釈、たとえば境武男によれば四牡篇を「安居する暇とてないつわものわれらの、その悲傷をじつと堪えながら『いくさ車に 四つの馬つけ、都ゆく道はるばると』と、微発せられて出征する」詩とし、各「王事靡盬」をやはり「王事盬むことなく」と訓読し、「うちしきる君がみこと」と解釈している。また、家井真は四牡篇を「祖先の従軍の様子を歌う」詩とし、各「王事靡盬」をやはり「王事盬まざ」と訓読している。この両者の相違は前述した鳥が木に止るという鴇羽篇の「肅肅鴇羽、集于苞栩」、「肅肅鴇翼、集于苞棘」、「肅肅鴇行、集于苞桑」と同様に四牡篇の「翩翩者騅、載飛載下、集于苞栩」、「翩翩者騅、載飛載止」という興詞をどう考えるかという『詩』解釈上の重大な問題をはらんでいるが、本稿では言及しない。とりあえず、ここでは現行の『毛傳』の訓詁態度の究明が目的であるのでこの点には深入りせず、近年の『詩』の原義的研究によれば、「王事靡盬」は「王事盬むこと靡し」と訓読されていることを指摘するに止める。この説が王引之『經義述聞』に由来するものであり、この説によって『詩』全体の「王事靡盬」が統一的に解釈できることはすでに鴇羽篇のところでも述べた通りであり、ここもまたまさにその例である。すると第一句全体はいつの時代の誰の作かは措いて、基本的には「従軍のつらさを歌った」句と言うことになる。

これに対して、『毛傳』は第一章の第三・四句の「豈不懷歸、王事靡盬」に「盬不堅固也、思歸者私恩也、靡盬者公義也、」と注している。つまり『毛傳』は「王事靡盬」を、鴇羽篇と同様に「王事が堅固でないことはない」ないしは「王事はすべて堅固である」結局「王事はゆるがせにすることはできない」と解釈していることになる。結果としては鴇羽篇と同じになるが、「王事靡盬」に対

して『毛傳』は若干ニュアンスを変えている。つまり搗羽篇の『毛傳』はこの句を「つらいがゆるがせにできない王事」と嘆きの原因を述べた句と考えているが、四牡篇の『毛傳』はこの句を「ゆるがせにすることはできない王事」と王の役務の重要性を強調して述べた句と考え、若干ニュアンスが変わっている。ここで『毛傳』は「王事靡盬」を搗羽篇のように「行役のつらいことを嘆く」句ではなく、「王事は公義でありその使命の重いことを言う」句と解釈しているのである。

「王事靡盬」の解釈を『毛傳』がこう考えているとすると、第一章全体を『毛傳』は、「四頭の牡馬はひたすら走るが、周への道ははるかに遠い。どうして故郷に帰ることを思わないことがあるのか。(しかし、望郷の念は私事である。一方)王事は重要でゆるがせにできぬ公事である。そこで、我が心は傷み悲しむのである。」と解釈していることになる。第二章については『毛傳』は第五句の「不遑啓處」に「遑暇、啓跪、處居也、臣受命、舍幣于禰乃行、」と言い「進物を禰に捧げたらすぐに(ゆるがせにできない王事のために)出発する」と規定する以外は、ほぼ第一章と同じと考えているようである。また第三章・第四章は、「翩翾者雛、載飛載下、集于苞栩、」^①「翩翾者雛、載飛載止、」という興詞を棚上げすれば、「王事は重要でゆるがせにできぬ公事である。父を養うことができぬが、これは私情である。」「王事は重要でゆるがせにできぬ公事である。母を養うことができぬが、これは私情である。」ということになる。第五章についても同様に「公事のため四頭だての馬車に乗って、風きって異郷を駆けていく。望郷の念にかられ、この詩を作り、母を養うことを思うがこれは私情である。」となる。したがって『毛傳』は四牡篇全体を「行役のつらいことを嘆く」詩ではなく、「王事の使命の重いことを言う」詩と理解していることになる。「豈不懷歸」「我心傷悲」「不遑啓處」「不遑將父」「不遑

將母」「將母來諗」等父母を養うことができぬことを嘆く句が繰り返し登場することに留意して四牡篇を読めば、王事の使命の重要性を述べる句がここにあることは不自然であり、「王事靡盬」に対する『毛傳』のこの解釈はかなり無理な解釈であるといわざるを得ない。そして、これは搗羽篇『毛傳』の「王事靡盬」に対する解釈とはかなりニュアンスを異にするものであり、もしかりに『毛傳』が純粹に訓詁学的な立場にたつて解釈をおこなっているのであれば起こり得ないことであろうと思われる。『毛傳』のこの解釈態度には別の意図があるのではないだろうか。

小雅・鹿鳴之什・采薇篇の第三章に、

○采薇采薇、薇亦剛止、曰歸曰歸、歲亦陽止、王事靡盬、不遑啓處、憂心孔疚、我行不來、

とあり、また小雅・鹿鳴之什・杕杜篇に、

- 有杕之杜、有睆其實、王事靡盬、繼嗣我日、日月陽止、女心傷止、征夫遑止、
- 有杕之杜、其葉萋萋、王事靡盬、我心傷悲、卉木萋止、女心悲止、征夫歸止、
- 陟彼北山、言采其杞、王事靡盬、憂我父母、檀車幟幟、四牡瘠瘠、征夫不遑、
- 匪載匪來、憂心孔疚、期逝不至、而多爲恤、卜筮偕止、會言近止、征夫邇止、

とある。これらの篇の「王事靡盬」に対しても、近年の「詩」の原義的解釈は、「王事靡盬」を「王事盬むこと靡し」と訓読する。たとえば、采薇篇を境武男は出征者とその妻の掛け合いの歌と考

え、第三章の後半部分「王事靡盬、不遑啓處、憂心孔疚、我行不來」を「君がいくさの やまなくて 家にやすらう いとまもなき 胸のうれしいの いやしげく 出て征きてより 帰りえず」と解釈しており、「王事靡盬」を「王事の盬むことなく」と訓読している。また家井真は采薇篇全体を「従軍の長びくに疲れる様子を歌」う詩としているので、第三章第三句の解釈はないものの境と同様に考えているのであろう。また、杕杜篇全体を境武男は「出征兵士の妻の歌」とした第一章の「王事靡盬、繼嗣我日、」を「このいくさ 日月重ねて いつはてるやら」と解釈し、「王事靡盬」を「王事の盬むなく」と訓読している。家井真は郭沫若説を引きつつ「家人が狄族の杜に於いて、『征夫』が何時歸れるかを『卜筮』すると、その卦に『征夫（の歸郷するは） 邇からん』と出た事を歌」う詩としており、これもいつまでも帰らぬ征夫を心配して家人が卜筮しているわけで、「王事靡盬」はおそらく「王事の盬むことなし」と訓読されているのであろう。

これに対して、『毛傳』は注をつけない。『毛傳』はある語句に一度訓詁をつけると、その同じ語句がその後意味が変わらずに再び出てきた場合には、再訓詁しないのが原則であるから、この両篇にあつては四牡篇と同様「王事盬きこと靡し」と読み、「王事をゆるがせにすることは出来ない」と解釈していることになる。そして、采薇篇の「日歸曰歸」「憂心孔疚」、また杕杜篇の「我心傷止」「我心傷悲」「女心悲止」「憂我父母」「憂心孔疚」等連れ合いに会うことが出来ない辛さを嘆く句が繰り返して出てくる詩中にある、かつ「王事が盬まない」という解釈が一般的であった「王事靡盬」という句を、「王事盬きこと靡し」と読み、「王事をゆるがせにすることは出来ない」と解釈するこの解釈がかなり無理なものであることは四牡篇の場合と同様である。

最後に、小雅・谷風之什・北山篇の第一章、

○陟彼北山、言采其杞、偕偕士子、朝夕從事、王事靡盬、憂我父母、

について、境武男は北山篇の詩意を『孟子』万章篇よりつつ「王事に勞して父母を養うことを得ざるなり。」とし、「王事靡盬」を「王事の盬なく」と訓読し、「きみがみことの やすむときなく」と解釈している。一方、『毛傳』はこれになにも注をつけていないが、前述したように一度付けた訓詁がその後変わらなず同じ場合には、注を付けないのが原則であるから、「王事盬きこと靡し」と読み、「王事をゆるがせにすることは出来ない」と解釈していることになる。これも「憂心父母」に留意すればかなり無理な解釈であることは前述の通りである。

(3) 小 結

以上概括したように、「王事靡盬」は「詩」本文それ自体の研究に基づく原義的解釈によれば、「王事がやまないと無理なく統一的に解釈できるにもかかわらず、『毛傳』はそうしていない。これはなぜであろうか。これは、①『毛傳』が訓詁的態度をとっていないか、②『毛傳』は純粹に訓詁学的態度で『詩』を解釈しようとしているが、その制作時には先秦時代以前のこの原義的解釈がまったく忘却されており、漢代通用の訓詁に基づいて書かれているか、のいずれかであると考えられる。そこで、この点を究明するために次に秦漢期にこの「王事靡盬」が他文献でどのような解釈されていたのかを考えてみることにする。

三、他文献の「王事靡盬」解釈

まず「塩鉄論」執務篇に、

